

名古屋

近代の都市づくり

— 三大都市への道 —



池田 誠一

【9】大名古屋〈昭和初からの10年〉…世界的な都市

1 昭和初の成長

昭和初期というと、なにか暗いイメージがあります。昭和4年(1929)の世界恐慌に代表される景気の悪さ、6年の満州事変に代表される軍国主義の始まりなどからでしょうか。

ところが名古屋に目を向けると、最初の10年間に出来たものが今日もたくさん残っているのです。たとえば、鶴舞の公会堂、中川運河、市庁舎、和合ゴルフ場、東山公園等です。市バスが走り出し、国産自動車アツタ号ができ、トヨタの乗用自動車第1号もその時代です(図1)。また拡大された市域では、

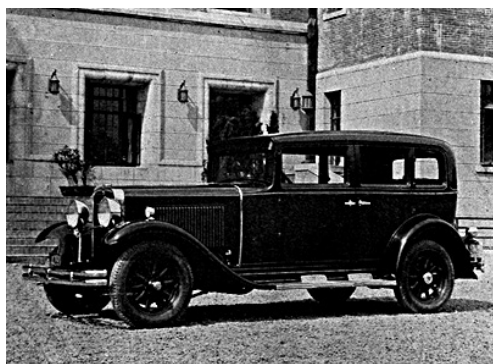


図1 昭和7年に完成した「アツタ号」。
名古屋と自動車の関係はここから始まった

市街地整備が進み、都市計画の街路や公園も出来上がりつつあったのです。

この、当時の名古屋の「力」は何だったのでしょうか。それはまず、人にありそうです。市長は実力者の大岩勇夫(昭和2~13年)です。商工会議所会頭は国際派の伊藤佑民(2~8年)でした。そして、産業振興や都市計画の分野にも、多くの人材がそろっていました。

今回は、昭和初期、大正時代に市域を拡張した「大名古屋」が、どう成長していったかを追ってみたいと思います。

2 目線は世界

(1)山林都市

大正時代、東郊耕地整理組合を指導した笹原辰太郎(前回紹介)は、その東の八事丘陵の自然の荒廃を嘆いていました。氏は、いずれは名古屋にも京都の東山(南禅寺付近)のような場所が必要になると考えていました。同志だった八勝館主人・柴田二郎は県庁の都市計画地方委員会に黒谷了太郎を訪ね、氏の主張する「山林都市構想」を八事で実現したいと頼んだのです。

山林都市とは、当時、イギリスのロンドン近郊で実現した「田園都市」を、黒谷がその設計者アン・ウィンと議論しつつ、日本流に工夫した構想です。この頃わが国では田園都市が注目を集め、東京の田園調布とか、阪神地方の鉄道沿線で、その試みがありました。しかし日本の特性を生かした哲学を持った八事開発は、きわめてユニークなものだったといえます。そして作られたのが「東部丘岡地」のマスタープランです（図2）。この構想では、①緑の保全、②曲線の道路、③区画の大規模化等、一般市街地の区画整理にはない考え方が取り入れられました。例えば、景観に大事な木は保存しましょう。道路は曲線を主とし循環（環状）道路も作りましょう。宅地は200坪位を目安にしましょう…等々。名古屋で初めての高級住宅地にふさわしい試みでした。

開発は、大正12年、まず八事耕地整理組合が設立されて動き出しました。次に南山耕地整理組合です。つづいて、新しい土地区画整理制度によって、八事、音聞山、上山、…と土地区画整理組合ができました。こうして東部丘岡地のマスタープランに基づいた八事丘陵の高級住宅地が出来上がることになったのです。

(2)中京デトロイト構想

当時、東京、大阪と比べると大きく遅れていたのが重工業でした。それまでの名古屋は、土偏、木偏、糸偏の産業が中心だったからです。

大岩市長がこの問題を解決するために着目したのが、自動車産業でした。名古屋には、鉄道車両、自転車、工作機械等のトップクラスの企業があり、航空機産業も動き出していました。自動車は、国内では、試作段階

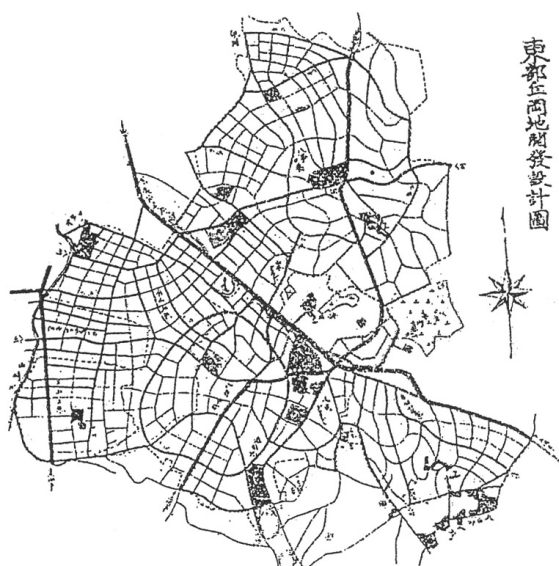


図2 東部丘岡地のマスタープラン。
斬新な開発思想で設計された（図の中心が八事）

のものはありましたが、まだ産業化までには至っていません。自動車といえばアメリカのフォード、シボレー車の時代だったのです。この自動車工業発展振興策は「中京デトロイト構想」と呼ばれ、すぐ実行に移されました。

昭和5年、市長は関係する企業を集め、それぞれの分担によって自動車づくりが始まりました。そして7年、その第1号が「アツタ号」と名付けられて公開されました。その車には東久邇宮が試乗し、さらに、耐久・走行テストも行われて、製品化されたのです。しかし問題がありました。価格です。官庁向けの高級車仕様だったこともあり、アメリカ車の2倍強。製造価格はさらに高かったのです。販売は伸びず、各社は本業の軍需拡大もあって自動車開発の余力がなくなり、生産はストップしてしまいました。

別の企業の試みもありました。8年、バス車両をターゲットにして、「キソコーチ号」がつくられました。そして市営バスなどに利用されましたが、これも販売がうまくいきませ

んでした。また、9年には豊田織機が乗用車第1号とされる試作車を作りました。ところがこれも、継続し、量産するには、軍のトラック製造という段階を経ることになりました。

このように残念ながらこの時代の自動車工業振興は量産にはつながりませんでした。しかし様々なチャレンジで、中京デトロイト構想を実質的に進めることになったのです。これらの試みは、自動車の部品産業を育成し、戦後、この地方のものづくり産業の進展に大きな意味を持つことになりました。

(3)百万都市

昭和初期の10年間には、先に述べたように、公会堂や中川運河を始め、様々な施設ができています(図3)。

これらの中で、ゴルフ場や飛行場には次のような逸話が伝わります。2年、商工会議所の会頭になった伊藤佑民は、「最近名古屋でも国際化が進んだが、足りないものが三つある」と言って、①西洋式ホテル、②ゴルフ場、③国際飛行場を挙げ、その推進を諮りました。その結果、他の協力を得たものもありますが、すべての事業が完成し、民間の力を示すことになりました。

一方、大岩市長は選任されると不景気で停

滞気味のプロジェクトに活を入れました。そして国勢調査に合わせた昭和5年に、①公会堂、②下水処理場、③第3期水道拡張、④市民病院の4大事業の完成を記念して、人口百万人突破の記念大会を行いました。市は人口を103万人と推定していたのです。ところがその後発表された調査結果では、90万人と大きく外れましたが、不景気の中ではよい試みでした。そして5年後の10年の国勢調査では、108万人と百万人を大きく突破したことが示されたのです。

人口100万人といえは、当時、世界ではまだ数少ない大都市だったといえます。名古屋は、明治の近代化以降70年を経て、世界的な都市へと躍り出ることになりました。

3 紀行 八事丘陵

… 山林都市構想の街 …

山林都市構想をもとに設計された昭和初期の名古屋東部丘陵地域の開発は、今日ではその道路形状に刻み込まれています。今回は、その跡を訪ね、当時の人達の志を見てみたいと思います。

〈八事から〉

地下鉄の八事駅の奥まった4番の出口を出ます。出たところは、八勝館の元の敷地です。左に進むと、次の角の手前にその正門が残ります。名古屋の代表的な料亭がだんだん蝕まれているようで残念です。

その先の右側は興正寺です。進むと重文の五重塔が見えてきます。寺の「八事山」という名前から、この付近が八事と呼ばれるようになりました。しかしここもどんどん敷地が売却されているようで気になります。

施 設	位 置	開 設 昭和 年	現 存	備 考
和合ゴルフ場	日進市	4	○	名古屋ゴルフ倶楽部
市 公会堂	昭和区	5	○	鶴舞公園内
水道第3期拡張	市内	5	○	東山配水塔等
下水道処理場	市内	5	○	堀留、熱田処理場等
中川運河	中川、港区他	5	○	本・支線
市民病院	瑞穂区	6	△	移設。現 名市大病院
振南プール	千種区	8	－	当時の最高水準プール
市 庁舎	中区	8	○	重要文化財指定
飛行場	港区	9	－	仮設。本設は13年に
東山公園	千種区	10	○	開園。動、植物園は12年

* 名古屋観光ホテルの開業は昭和11年になった。
* この時期に名古屋城の公開(S6)、徳川美術館の開館(S10)もあった。

図3 昭和初期に出来た名古屋の主な施設。
名古屋の近代を代表するものが多い



マンションに囲まれた八勝館の正門。
戦後、昭和天皇来名の時の宿舎だった

次の信号を左に曲がります。緩やかな曲線道路です。次の信号を左に選ぶと、この付近の区画整理を特徴づける環状道路に入ります。アップダウンのある一周3キロほどの道です。少し上り、バス通りを渡ると下りになります。緩やかに左・右とたどると左から急な坂道が降りてきます。足元に高照寺という道標があり、それを上ると天道山高照寺があります。その辺りの丘は、戦前はお花見のできる遊園地としてにぎわいました。



左側の道が環状道路。
歩くと結構なアップダウンがある



環状道路は緩やかにカーブして八勝通に上っている

環状道路を南に進むと変速のX型の交差点です。正面の道を進むと、道は右にカーブして上りになります。坂を上ると幹線道路です。地下鉄の通る道路で、八勝通と呼ばれます。昭和25年の国体の時、昭和天皇が宿舎の八勝館から瑞穂グランドに向かった道でした。

〈杓中へ〉

交差点を渡ると道はまた下り始めます。一本目の道で環状道路から外れ、右手の急な坂を上ってみましょう。この地域は坂道ばかりです。上ると今度は急な下りです。下りた道はバスの通る道で、角には昭和初期のお宅が残ります。右に曲がり、次の道を左に曲がってまた坂道を上ります。両側の家からの木が覆いかぶさってきて昼なお暗き道です。この道はいかにも「山林都市」の成熟を思わせます。坂を下り始めると、マンションが現れ広い通



急な坂道を下る。
向こうの道がせりあがっているように見える



成熟した「山林都市」を思わせる道。
もうあまり残っていない



静かな尾根筋の道。
広い土地区画が環境を守っている



また急な坂道を下る。
道を掃き清めている人がいた

りに出ます。

その道を左に、緩やかにカーブしながら次の信号（交差する道は環状道路です）を過ぎ、すぐの信号の角を直角に右に曲がります。急に下ってすぐ上る道です。上って次の角を左に曲がります。尾根道になっていて、周りは



昭和初期。広い土地を求めて、「南山」の地に、
ライネルス師が学園を設立した

高級住宅地の中でもとりわけ高級なお宅が並びます。

次の角を右に、急な坂を下って谷間の道を左に進みます。少し行くと右側は教会になり、丘の上に南山教会の塔が見えます。正面は南山学園の昭和初の建物です。その建物で右に曲がり、そのまま進むと杵中の交差点。右に地下鉄のいりなか駅があります。

4 大岩マジック

世の中が恐慌に翻弄され、軍国主義化が始まった時代。大岩市長はどうやって大きなプロジェクトを完成させることができたのでしょうか。そのマジックの答は、税金によらない土地区画整理事業にあるようです。

中川運河は区画整理で造られました。都市計画でできた多くの道路や公園は区画整理で造られたものです。しかし、施設整備には別の理由もありました。たとえば東山公園にはこんな話があります。

新しい動物園をつくりたいという要請に、大岩市長は「ただの土地を探してこい」と言ったといいます。当時は市域が4倍に広がり、一斉に区画整理が進んでいました。そのため各組合は、土地の魅力・付加価値を高めるための競争をしていたのです。そして東山公園の広大な土地は寄付されました。しかしその結果、東山公園を誘致した区画整理組合は、動・植物園の開園で路面電車が走りだし、地価は何十倍にも上がったといいます。市の魅力的な施設は引っ張りだこだったのです。

〈主な参考文献〉

- ①同編集委員会『新修名古屋市史⑥』（2000、名古屋市）
- ②亀田忠男『大岩勇夫と大名古屋』（2001、（株）地域問題研究所）
- ③牧幸輝「『中京デトロイト計画』とその帰結」（2011、オイコノミカ48）